第18号　2014年12月

北海道大学 Hokkaido University
Archaeological Research Center News Letter

埋蔵文化財調査室ニュースレター

特集　炉をめぐるヒトの営み

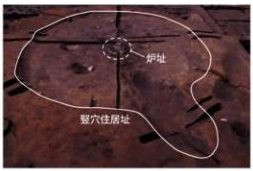
北海道大学構内の続縄文文化や擦文文化の遺跡からは、多くの炉址（ろし）が発見されています。考古学的に炉址とは、過去の人々が食料の加熱調理や採光、暖房のために火を焚いていた場所（炉）の痕跡と定義されます。発掘の際は、土色の違い、炭粒や灰の集中などから炉址の認定がなされます。炉址は、住居の内・外いずれからも発見されており、それらの周囲でどのような活動が繰り広げられていたのかを知ることは、遺跡でのヒトの営みを復元していくのに重要な手かがりとなるでしょう。

本特集では、北海道大学構内の遺跡からどのような炉址が発見されているのか、炉址の調査からどのようなことが分かるのかをご紹介していきます。

▲北大構内のK39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点での炉址（HE10）の調査状況

人文・社会科学総合教育研究棟地点の14a層を調査していく過程で、コの字状に配置された人頭大の礫、その内部から炭粒や灰が多量に確認されはじめたことから、この場所には屋外炉址があることが分かりました。続縄文文化初頭（今から約2,200年前）に残されたと考えられる炉址です。炭粒や灰とともに微細な獣骨や魚骨も多量に残されていました。

北大構内の遺跡から発見された炉址



▲竪穴住居址に伴う屋内炉址
人文・社会科学総合教育研究棟地点の13b層から検出された舌状の張り出し部を有る竪穴式住居址（9P10）の中央部分からは、礫で囲われた炉址が発見されました。縄文文化前期のもので、今から2000年前頃のものです。

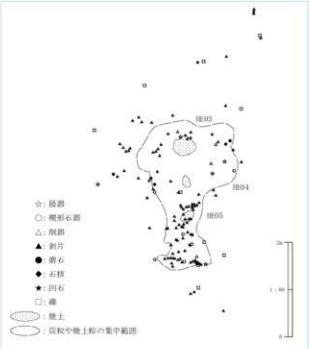
▲礫で囲われた屋外炉址（樹脂で剥ぎ取り、造形復元したもので、埋蔵文化財調査室展示室において展示中）
大形礫で囲われた内部から、白色の灰に混じって多量の獣骨や魚骨が発見されました。人文・社会科学総合研究教育棟地点の14a層検出の屋外炉址（0E121）で、縄文文化初頭、今から2200年前頃のものです。

▲礫で囲われていない屋外炉址
大学病院ゼミナール棟地点の8b層検出の屋外炉址（0E02）で縄文文化前期、今から1900年前頃のものです。赤色に変色した円形の焼土のみが確認されており、灰や炭化物はきれいに清掃されてしまった可能性があります。

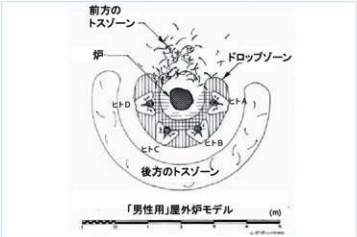
北大構内の遺跡から検出された炉址（造形復元した炉址の展示場所　☆1：埋蔵文化財調査室　☆2：人文・社会科学総合教育研究棟）

地点	地点名称	屋外炉址		屋内炉址		時期	報告書
		記石あり	記石なし	記石あり	記石なし		
1	K39遺跡 サークル会館地点		6			擦文文化	『北大構内の遺跡 1』
2	K39遺跡 ポプラ並木東地区地点		2			続縄文文化	『北大構内の遺跡 5』
3	K39遺跡 学生部体育館地点		4			続縄文文化	『北大構内の遺跡 6』
4	K39遺跡 中央道路共同溝（第４工区）地点		1			縄文文化	『北大構内の遺跡 10』
5	K39遺跡 ゲストハウス地点		4			続縄文文化	『北大構内の遺跡 10』
6	K39遺跡 西門地点		3			擦文文化	『北大構内の遺跡 12』
7	K39遺跡 創成科学研究棟南地点		5			続縄文文化	『北大構内の遺跡 14』
8	K39遺跡 サッカー・ラグビー場地点		2			擦文文化	『北大構内の遺跡 14』
9	K39遺跡 南新川国際交流会館地点		7			擦文文化	『北大構内の遺跡 18』
10	K39遺跡 北キャンパス温室地点		3			続縄文文化	『北大構内の遺跡 18』
11	C44遺跡 植物園収蔵庫地点		1			続縄文文化	『北大構内の遺跡 18』
12	K435遺跡 南新川国際交流会館外構地点		2			擦文文化	『北大構内の遺跡 19』
13	K39遺跡 恵迪寮地点		33		1	擦文文化	『サクシュコトニ川遺跡』
14	K39遺跡 人文・社会科学総合教育研究棟地点	21	105	4	14	縄文～続縄文文化	『K39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅰ』
15	K39遺跡 工学部大用実験研究棟地点		12			続縄文文化	『K39遺跡工学部大用実験研究棟地点発掘調査報告書』
16	K39遺跡 大学病院ゼミナール棟地点		5			続縄文文化	未報告

■ 炉址と遺物分布との関係



▲創成科学研究棟南地点で検出された屋外炉址（HE03・04・05）

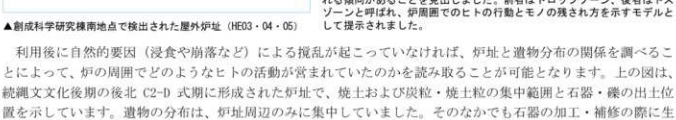


▲屋外炉を真上から見たときの炉とゾーンの配置関係
(Binford, L.1983 "In Pursuit of the Past"より)

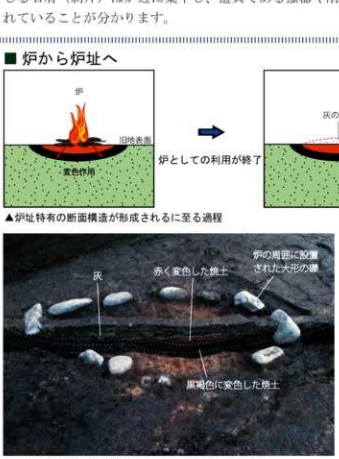
アラスカのカリブー狩猟民ヌナミウトに関する民族誌考古学の調査をおこなった米国の考古学者ルイス・ビンフォード（1930-2011）は、男性ハンター達がカリブー狩猟に伴うキャンプ地で、炉の周囲に着座して動物骨の処理作業をおこなっていた際に、中心的な作業場となる炉の周囲にはより小さな骨のカケラが落とされ、その前方や後方にはより大きな骨が投げられる傾向があることを見出しました。前者はドロップゾーン、後者はトスゾーンと呼ばれ、炉周囲でのヒトの行動とモノの残され方を示すモデルとして提示されました。

利用後に自然的要因（浸食や崩落など）による撹乱が起こっていなければ、炉址と遺物分布の関係を調べることによって、炉の周囲でどのようなヒトの活動が営まれていたのかを読み取ることが可能となります。上の図は、続縄文文化後期の後北 C2-D 式期に形成された炉址で、焼土および炭粒・焼土粒の集中範囲と石器・礫の出土位置を示しています。遺物の分布は、炉址周辺のみに集中していました。そのなかでも石器の加工・補修の際に生じる石屑（剥片）は炉辺に集中し、道具である掻器や削器、磨石、石斧は、炉辺からやや離れた位置から発見されていることが分かります。

■ 炉から炉址へ



▲炉址特有の断面構造が形成されるに至る過程



▲発掘の過程で調査記録のために露出させた炉址の断面
（人文・社会科学総合教育研究棟地点14a層から検出されたHE55）

地面で火が一定時間にわたって焚かれると、燃焼された地表に最も近い部分は、燃焼に伴う酸化で変色し、赤色を呈する焼土が形成されます。赤色の焼土の周囲には、多くの場合、熱の影響による有機物の炭化で黒色を呈する焼土が形成されます。一般的に、炉として利用されると、焼土の上や周囲には火が焚かれた際に生じる灰や炭粒が集積していきますが、そうした集積箇所には動物の微細な焼骨片や植物の炭化種子が伴っていることが多くの場合に認められます。それらの食料残滓の分析をおこなうことによって、それぞれの炉址でどのような食料の加熱調理がおこなわれていたのかを把握することも可能となります。

■ 造形復元された炉址

2001～2002年度に実施されたK39遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地点での発掘調査では、縄文文化の貴重な炉址が多数確認されましたが、発掘後でもそれらの発見時の状態が観察でき、教育・普及活動に活かすことができるように、造形復元するための試みもあわせて実施されました。埋蔵文化財調査室には、大形の礫で囲われた屋外炉址(2頁参照)が、人文・社会科学総合教育研究棟1Fロビーには、礫で囲われていない屋外炉址の造形復元が展示されています。これらは、樹脂を使って遺構面の状態を忠実に剥ぎ取り作成されたもので、炉址の焼土や灰、炭粒、焼骨の「生の」状態を、今でも目の当たりにすることができます。

▲人文・社会科学総合教育研究棟１Ｆロビーで展示されている造形復元された屋外炉址

■ 第11・12回遺跡トレイルウォークの開催

北海道大学埋蔵文化財調査室の恒例行事となった遺跡トレイルウォークの第11回を2014年7月13日、第12回を2014年9月28日に開催いたしました。第11回目では、埋蔵文化財調査室で発掘調査をおこなっていた人獣共通感染症研究拠点地点の見学を中心に、先史時代における河川とヒトの営みとの関係に焦点をあてたコースを訪れていきました。人獣共通感染症研究拠点地点の発掘現場では、大規模な埋没河川とそのなかから木製品や土器などが出土している状況をご覧いただきました。第12回目は、北大構内の西側をかつて流れていたセロンベツ川沿いの地形と縄文文化の集落に焦点をあてたコースをめぐっていきました。縄文文化の集落が確認されている農学部実験実習棟地点の発掘現場を見学し、その後、セロンベツ川の水源の一つである湧水地があった北大植物園を訪れ、河川による地形や現在でも窪みとして観察できる竪穴住居址をご覧いただきました。両回ともに多数の方々のご参加をいただき、盛会となりました。

編集後記

夏休みにキャンプ生活を体験すると、様々な作業、談笑、飲食が、炉を中心として営まれていることがよく分かります。古今東西の様々な遺跡から炉址は発見されてきますが、それら炉址からヒトの行動の軌跡をどのように読み解くのか、考古学者に課せられた重大な課題と言えるでしょう。(高倉)

北海道大学埋蔵文化財調査室ニュースレター　第18号
平成26(2014)年12月25日発行

発行　：北海道大学埋蔵文化財調査室
〒060-0811　札幌市北区北11条西7丁目
電話　：011-706-2671　FAX：011-706-2094
e-mail：hokudaimaibun@gmail.com
URL　：http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~q16697/maibun/index.html